

『柴田町史 通史編Ⅰ』より

4 白鳥事件と柴田家中

大河原町役場

「歴代略記」の秋田口の記事のつづきをみることにしよう。

柴田中務意広

是より次第に官軍仙台領に入る、時に亘理へ繰り込みおり候官軍、10月舟岡へ来り乱暴之所為あり、是を柴田御家臣見るに忍びず、官軍是を残念に心得、官軍隊長より伊達家へ掛合に及ぶ、猶更柴田家は羽州戦争にて官軍を悉くなやまし候に付、官軍是をにくむ、但し官軍隊長にて仙台へ来る者は羽州より引き揚げたる人数と云ふ、官軍入り込む後、仙台諸藩高名之面々皆切腹申しつけらる（中略）意広公、伊達安芸殿へ御預り、11月3日安芸殿屋敷にて自殺し給ふ

柴田家中は官軍の乱暴をみるに忍びなかった。官軍はこれを残念に思った、という。ここには乱暴をみるに忍びなく行動に出たという、その行動については記されていない。つまり「歴代略記」はわれわれが現在、白鳥事件とよんでいる悲劇の発端については何も記していない。これについては、悲劇の犠牲者のひとり柴田意広の孫にあたる故柴田倫之助氏の報告によるしかない。以下、同氏「白鳥事件の真実」（柴田町郷土研究会編『郷土研究会会報』2所載）から抄録させていただく。

意広は天保3年（1832）、先代外記意利の長子として生れ、平凡な養育をされて成長をした。（中略）

意広は文久3年（1863）、32歳の時、部屋住（家督相続をしないうち）であったが、御申次の職に就任、翌文久4年正月、特に召されて藩主慶邦の前で、即席の名題「孔明論」を与えられ、これを作文し、案下に呈し、殊の外の感賞にあずかったという。彼は此の頃から深く藩主の眼に止ったものと思う。慶応2年（1866）35歳の時、御小姓頭に任ぜられたが、慶応4年3月、父意利の死によって、船岡領主を継いだのである。

同年4月12日藩主慶邦白石城出陣に際し、精鋭御近習隊40名を率い参加し、そのうち6月初旬若年寄に任ぜられ、大番組兼役となり、八番組を預ることになった。

事件の発端

既に述べたとおり、柴田氏が最前線に赴いたのは岩城口守備に出動したときである。帰国後、今度は直ちに秋田口に出陣した。9月17日、仙台藩降伏による総軍引き揚げの命令が現地に到達し、これに従って9月29日、仙台に帰着した。9月8日、父につづいて母が死亡した。事件は新政府軍が仙台領に進駐している間に起こった。以下柴田氏の記事を抄録する。

浜海道相馬口破れてから9月下旬、西軍は続々と亘理に進入、更に9月の末から10月初にかけて仙台進駐となり、仙台北下は勿論殊に仙南地方は彼等西軍の兵士の自由濶歩に委せざるを得なかった。特に仙台進駐をしないで亘理領内に停留していた西軍方芸州藩の兵は、錦切れ（服の片腕上に錦の片を縫いつけ、官軍の印とし、非常な権力にしたという）を自慢にしながら阿武隅川を渡り船岡領内に来り、大沼の白鳥狩りをやった。之を見る領内の住民は甚だ傷心の眼ざしでこれを眺め「大鷹明神の使鳥として尊敬しているのだから、どうぞ射たないでくれ」と

幾度も嘆願したが、彼等は毫も理解してくれなかったらしい。西軍兵の船岡来遊が度重なるに及び領内住民の激昂甚しく、遂に不祥事の起る時が来た。

事件は10月28日に起こった。既に新政府軍の帰国が始まっていた。

柴田家中士の小松亀之進（父は種吉）は同森玉蔵（森文治の妹婿）、同島貫豊之進（島貫慎之丞の弟）、同森良治（父は勘兵衛）の4人が耕地横橋田の水路で「エガイ」という雑魚とりをしていた。折りも折り芸州藩兵数人が、例によって小坂船場から舟で阿武隅川をわたり西小坂に来り、細道伝いに領内大沼へ行き、白鳥を射ったのである。

砲声を聞いた4人は、二手に分かれて行動にうつった。

亀之進と玉蔵は小峯を越した近くの角田領神次郎新屋敷某家（現佐藤家の先祖喜七方と云う）より獵銃を借りて、彼等を懲さんとこれを追うた。一方、豊之進と良治は中名生七草屋敷某家（現今野家の先祖藤吉方と云う）へ行き、獵銃を借りようとしたが、主人藤吉から言を左右にして遂に借りることが出来なかったという。亀之進と玉蔵は引返し大沼附近を眺めたが、其の時は芸州藩士は獲物もなく帰った後であった。両人は「さては舟場だ」と言いながら追跡、阿武隅川小坂船場へ走った。もう其時彼等は既に舟に乗って川の中流に行ってしまった。玉蔵は口惜しがり、之を狙い射とうとしたが、亀之進は時の不利なる事を説いて強く止めたという。然し引金は轟然と一弾を放った。が当時の銃の威力は大したものではなく、わずかに舷側に当たっただけだった。芸州藩兵は帰ると直ちに此の旨を報告したので、互理駐留の上司から、同夜仙台鎮撫使参謀の元へ訴え出たのである。事件は遂に仙台に移ってしまった。西軍参謀より仙台藩執政に交渉が始まったのは10月29日であるが、犯人の早急捕縛と責任を如何にとるかであった。これより先、在所船岡に於ても、在所家老を始め上司の者が即夜仙台屋敷に通報し、柴田家より藩執政に届け出で、29日夜監察上郡山守人に御小人数人（犯人を捉える卒か）を付けて船岡へ向ったのである。30日、小松、森を捕縛、その夜上郡山監察は帰仙して執政に報告、やがて両犯人の護送され来ることを待つて居た。だが到着したのは小松亀之進1人のみで、森玉蔵は途中逃亡せりとの事で姿を見せなかった。

事件の展開

仙台市博物館所蔵の「伊達家寄贈文書」のなかに「柴田中務家臣吟味の為可差出参謀達書」（次ページ写真・上）という文書が含まれている。その内容は

柴田中務家来森玉蔵、小松種吉倅亀之進御吟味の筋有之候間、早々可差出旨 御達有之候事
という、ごく短いものであるが、これこそ森・小松両名に対する新政府軍の召喚状であり、白鳥事件に関する数少ない生の資料である。これに対し、森玉蔵の逃亡は鎮撫使参謀高橋熊太郎を激怒させた。高橋参謀は藩執政と主人意広の責任を迫った。こうして「柴田中務不審につき家老へ可預置参謀達書」（次ページ写真・下）が発行された。これには、

柴田中務御不審之趣有之候二付、嚴重取締、其方共に預け可置旨 御達有之候事
とある。小松亀之進は入牢、柴田意広は隣邸涌谷伊達家御預けとなり、更に玉蔵捕縛として再び御小人数が派遣された。30日夜遅くのことという。

<注> 右の二つ達書については柴田氏の解釈に添って発行順を解釈したのであるが、同時に発行された可能性も捨てられない。こう解すれば、玉蔵逃亡のことがなくとも、発砲の時点で中

務の運命は決した、
といえる。

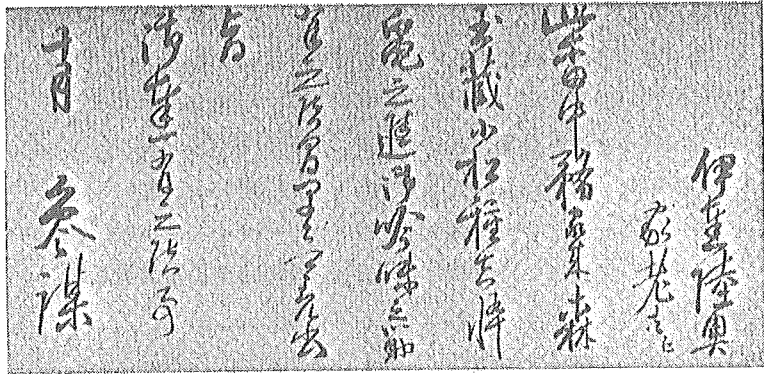
以下、「白鳥事件の真実」から少し長目の引用をする。

11月1日、高橋参謀は執政遠藤吉郎左衛門を呼び寄せ、向う3日の内に玉蔵を捕えよ、然らざる時は意広を東京に護送吟味する、太守親子謝罪にも影響すると厳談されたので、執政は詰所に帰り、意広の親戚(叔父)上野周吉と家中士中沢廉之助を呼び、事の次第を伝えた上、これに善処する事を促した。—太守親子は10

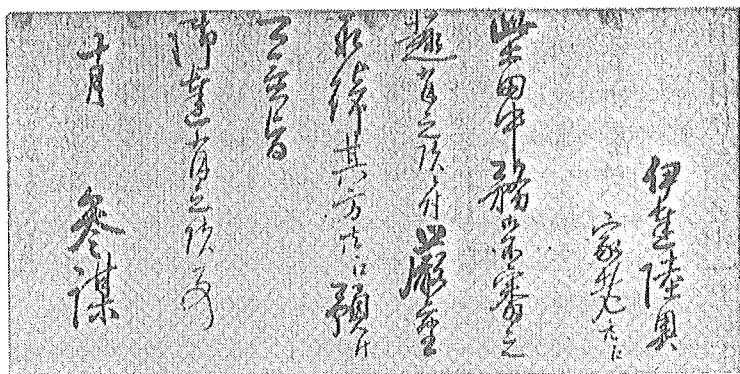
月27日東京へ出発、高橋参謀も11月5日出発の予定—11月1日、藩は監察小人を増員して船岡に派遣、柴田家中に於ても容易ならざる事態を控え、八方手を尽して搜索すれども効なく、11月3日派遣された一同空しく帰仙、此の旨を報じたところ、参謀激怒して曰く「仙台監察の懈怠何ぞや、又意広の罪は当然免れず」と。そこで仙台一門、諸執政、参政などの総評議となり、是非の論議を交はされたが、結局藩の為には、犯人2名を斬に処するは勿論だが、残念ながら此の際意広を割腹させて責任をとる以外に道はないではないかという事に決定された。でも此の調書を参謀に出せば、発砲事件は主人意広喪中謹慎中の事でもあり、地方信仰上の問題もあるので、或は寛大な処置あるかも知れずとして提出されたという。所が予期に反し、高橋参謀は犯人2名の処刑は当然にして、意広の割腹尤もなりと強要されたのである。

11月4日、和田織部、若生文十郎らが涌谷伊達屋敷を訪ね、参謀の意向を伝えた。同日夜、石母田但馬、遠藤吉郎左衛門が高橋参謀の所に赴き、決定した処分を伝えた。同夜、意広は涌谷屋敷において塩森左馬之介(意広の叔父)の介錯で割腹した。この時の意広の遺書と辞世の詩、及び歌が残されている。ただし、この仙台市博物館に伝わるものが中務意広の自筆かどうかとなると、否といわなければならない。遺書の冒頭に「11月17日横田官平、塩沢武司、4条候帰参方用ニて上着ニ、左之通之柴田外記遺言書相出候」とあることからの推論である。遺言には次のようであった。

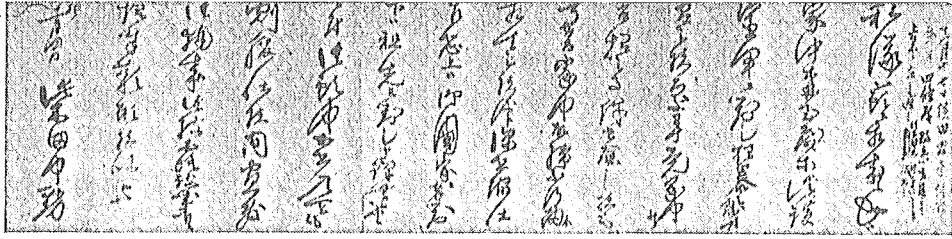
私儀御預ニ相成候趣ハ、家中森玉蔵ホ此度官軍ニ対シ、狂暴之致方有之候処、畢竟家中共右様



柴田中務家臣吟味の為可差出参謀達書(仙台市博物館所蔵)



柴田中務不審につき家老へ可預置参謀達書(仙台市博物館所蔵)



柴田中務の遺書（仙台市博物館所蔵）

之事件を醸し候兼而家中取締不行届め相生シ候儀ト、深恐縮仕候、乍恐上ハ御国家ニ奉対、下ハ祖先に対し申訳無御座二付、御預中甚恐入候へとも、割腹仕候間宜敷御執成、御披露被成下候様、奉歎願候以上

支干及び月日付は「卯ノ11月4日」とある。慶応4年であるから「辰ノ」とすべきを誤っている。意広の誤りか、書き写した者の誤りか。辞世の詩及び歌は次のとおり。

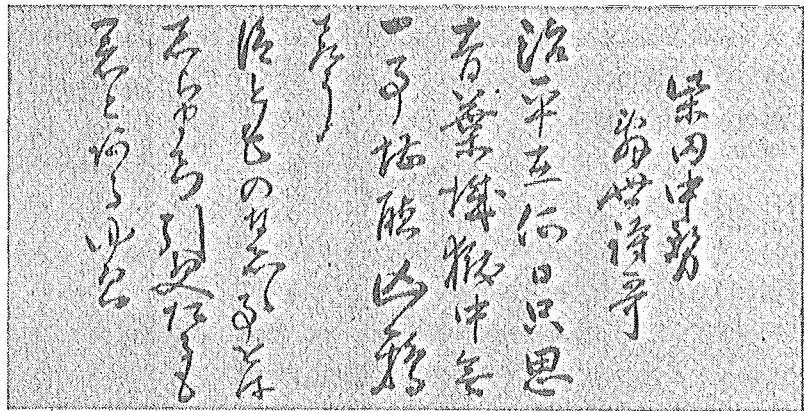
治平在何日 只思青葉城 獄中無一事 堪聴凶鴉声

臣とものなせし事をはしらま弓引受なるも君とあるゆゑ

事件の結果

同夜深更、小松亀之進も牢前で斬首された。その夜のうちに、これらの一切について使番軍監の検死があり、ただちに結果は参謀に上申された。しかし、参謀はいまだ玉蔵の始末のついていないことを厳しく批難し、明5日、岩沼で玉蔵を差し出す旨を約束させた。こうして、第二の悲劇がおきた。

逃亡中の玉蔵にかわる首を用意すること、それが老いつめられた柴田家中の結論であった。白羽の矢は玉蔵の義兄森文治にたてられた。



柴田中務辞世の詩歌（仙台市博物館所蔵）

5日早暁在所家老山田貫之助外家中親戚一同で森文治に詰め入

り、事情の容易ならざるを言い聞かせ覚悟を促した所、文治も「止むなし」と悲壮な返事のもと同僚の家中士押野盈（みつる）の手によって首を斬られたのである。時に52歳。

（中略）

文治の首は玉蔵の首として、上士達数人付添い、更に大肝入平井与五右衛門同行、本町の百姓庄六に首桶を背負はせ、即日岩沼へ急行し、かねて連絡して置いた仙台より出張の塩森左馬之介にこれを提出、塩森より高橋参謀の元へ「玉蔵召捕えたれど、反抗甚しき故首とせり」といって、検分に供したのである。

事件は一応着落を見た。参謀等は翌6日朝、岩沼を出発、東上したが、一方仙台では11月8日芸州藩本陣にも、犯人処刑と意広責任割腹の旨を伝えたという。

意広遺骸は11月5日仙台屋敷にて納棺、一夜を過し、翌6日仙台出発、白幡舟場を渡り、船岡原町を過ぎて、菩提寺曹洞宗妙高山大光寺に入り、その夜は速夜法要あり、翌7日葬儀が行われた。家中一統領民相会し、集まる僧8ヶ寺、導師は大光寺22世玉応見龍大和尚であった。法名は解脱院鋒安常担居士と号す。一意広遺骸は大甕（かめ）に安座させ、それを木棺に納めたものという。又死後1週間、領内1週間、領内に謹慎令を布いたというのが、当時の白鳥事件に於ける意広の死が相当な衝撃であったからであろう。—

(中略)

行方を晦^{くらま}していた彼（玉蔵）はどこに潜んでいるのか、香^{よう}として不明であった。船迫の山中に隠れてるとか、茶屋に居るのを見たとか、そして船岡の人々の中に「大光寺解脱院様の墓前に跪^{ひざま}ずいているのを見た」と言い交はされたが、依然として捕えられなかった。

明治2年の春初め頃、船迫宿場を警戒して居る目明し龍蔵は遂に彼の所在を発見したので、ひそかに船岡へ来り、本町の幸内茶屋で船岡警戒の目明し弁五郎と連絡打合わせ、兩人同道で船迫に至り、龍蔵が彼を捕縛して弁五郎に引渡したという。此の旨直ちに家中の其の筋へ届け出たので、玉蔵は入牢数日間にして、斬首の刑に処せられ、遺骸は附近に埋殍された。処刑の場所は大森馬の沢（附近をシツタテ沢と言う）で、古くは近くに「玉蔵首洗の場」があったそう^うだ。（以下略）

仙台藩62万石が28万石に削減されたのは12月6日のことである。柴田家中は新たな生活の術^{すべ}をもとめて模索が始まるのであるが、そのことについて語る前に、白鳥事件の背景にあった柴田・刈田地方の白鳥信仰について述べる。

記録のなかの白鳥信仰

柴田・刈田地方の白鳥信仰の一端をうかがい知ることのできる資料の初出は、寛永2年（1625）5月吉日付の「伊達政宗覚書状」（『大日本古文書』家わけ3「伊達家文書」第862号）の冒頭の1条にある。この書状は「（伊達）忠宗始テ入国ニツキ政宗ノ注意」9か条からなるもので、政宗の自筆といわれている。冒頭の1条とは次のようなものである。

今度下向之上、鷹場鉄放場、若機遣も可有之候歟、白鳥者鉄放^はよて打候事、白石計者無用^{はかり}ニ候、鷹よてハ合候へく候、其外何方よても打不苦候事

以下、6条目までが在国中のリクリエーションともいべき鷹野や川獵・山追に関するものであり、それも右の条文にある「白石計者無用ニ候」のような注意事項もないわけではないが、むしろ帰国中はせいぜい鷹野などで気散じにつとめよ、といったニュアンスが感じられる。結局、政宗のこの覚書状は第9条「在国中は機遣をやめ、休息然るべき事」に集約することができる。そして、そのような性格の手紙の第1条に、白石地方に限って白鳥は鉄炮ではなく、鷹野とすべきことを、殊更に指示しているのである。捕獲を禁じているのではなく、捕獲方法を指示している点が興味深い。

政宗自身、3年前の元和8年（1622）11月18日、「刈田郡白石へ白鳥鷹野トシテ御出」、同月20日帰城しているのであるが（『伊達治家記録』）、政宗の指示の背景に、刈田地方の白鳥信仰を垣間見

ることができよう。

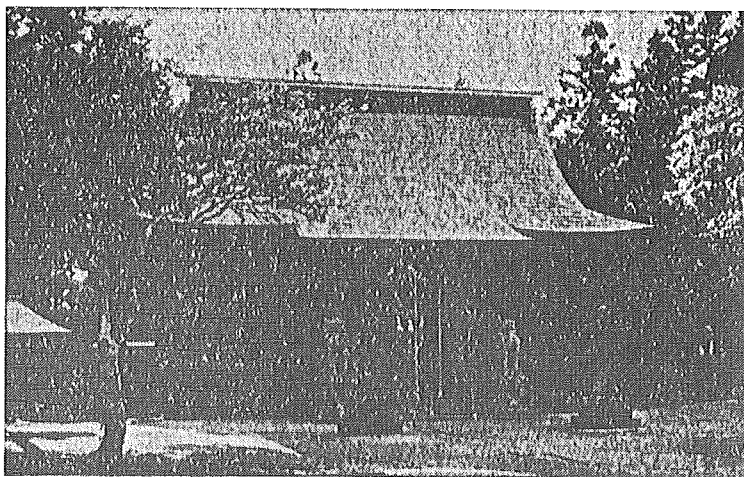
柴田・刈田地方の白鳥伝説

白鳥信仰を継承する白鳥伝説とよばれるものが、藩政時代には広く知られており、諸書に紹介されているが、伝説について最も整理されているのは『奥羽観蹟聞老志』の記事であろう。そのあらまは次のようなものである。

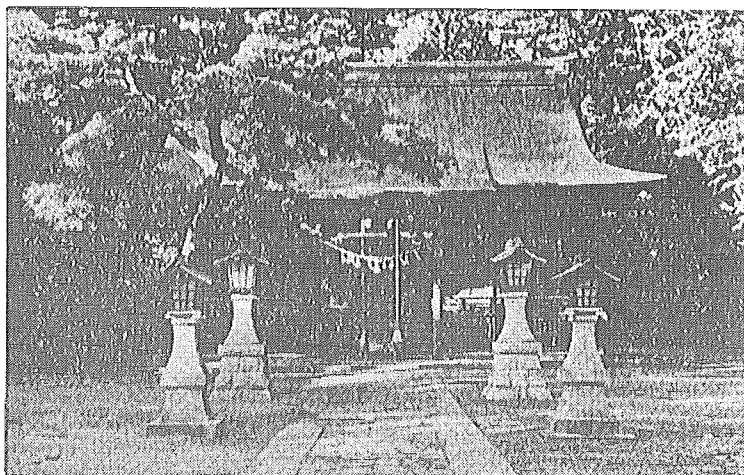
欽明天皇（第33代）の第4皇子橘豊日尊は青年時代、東北諸国の民情をみてまわり、東国のある村に住んだことがあった。尊には玉倚姫たまよりという妃がいた。玉倚姫が懐妊したとき、姫が言うには前夜白鳥が東方より来り、ふところに入る夢をみた、と。尊はこれを聞いて、自分は東国にあって白鳥の神に祈って久しい、思うに夢のなかの白鳥は神の化身である、と言った。月が満ちて、姫は男児を生んだ。

月日が流れ、使いがきて、尊は都へ帰った。3年もすぎると、都からの音信も途絶え、姫は尊を慕って、ついに病床に臥した。乳母は姫の病が重くなるのを見るにたえず、幼児をつれて河畔に立ち、涙ながらに言った「君、もし本当に神明の化するところならば、身を母後の死にかえて、両親の再会の志をとげしめよ」と。乳母はそう言いかけると、幼児は水中に投じた。すると幼児は白鳥となって飛び去った。姫はほどなくみまかり、乳母も苦しみもだえながら死んだ。村人は都に書状を送って姫の死を伝えた。都から高貴な品物とともに使者がきて、姫の墓前で天意を伝えた。すると、使者の言葉が終らないうちに、墓陵のうゑに白鳥（白鷹）が飛び立ち舞った。使者が帰京して事の次第を報告すると、尊は玉机・宝鏡などを贈り神社を建立させた。この神社を大鷹宮と号した。尊は後に踐祚して天皇となった。第31代用明天皇である。

以上は「大高宮」（大高山神社）の項に見える白鳥伝説の記事のあらましである。この伝説は大

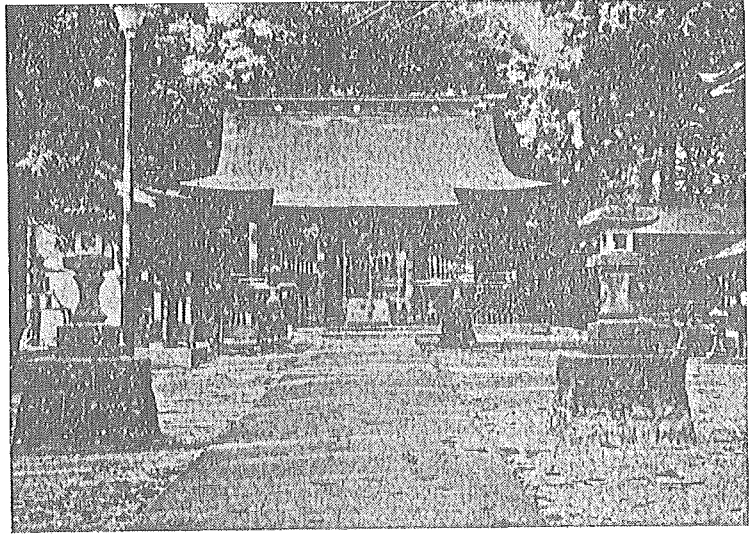


大高山神社（大河原町金ヶ瀬）



刈田嶺神社（蔵王町宮）

高山神社だけでなく、宮の刈田嶺神社、村田の白鳥明神社を中心に伝えられているものであるが、船迫地区にも同様の伝説が伝えられている。これによれば、玉倚姫の父は真野（万能）長者といい、姫の美貌が都にまで聞えるところとなり、橘豊日尊が妃にと望むが、長者は1人娘であることを理由に拒否した。尊から芥子実千俵やら灰縄千尋な



白鳥明神社（村田町）

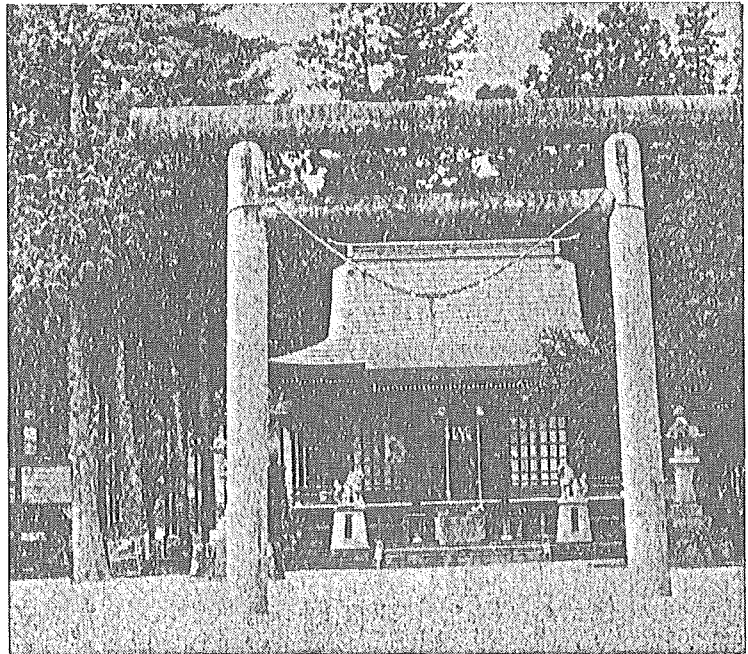
どの難題が課せられるが、これを解決した。ために尊は身をやつし、山路と名乗って長者の屋敷の下僕として住み込んだ。山路は笛をよくし、これに魅せられた姫が山路を召し出し笛を吹かせることになった。この時、山路は都人の服装に着替えて現れたため、その素姓が知れた。以下、結婚、1子誕生、別離、死となる。

こうした伝説によって、白鳥は神の使いと代々語り継がれてきたのである。刈田郡の児捨川そがや投袋なぐろなどという地名はこの伝承のなかで説明される。曰く、児捨川は乳母が幼児を投じた川である、

と。曰く、姫が尊を見送ったとき、投袋まで来て疲れ果てて、持っていた袋を投げたので投袋という、と。

伝説の背景

優雅な姿を水面に映す白鳥、その優雅さだけで信仰となりうるものであろうか。人が信仰の対象とするようになった背景には、ある時代、白鳥が人間の営みと深くかかわりをもっていたという事実があるのではないか。姫と尊との話は、そのかかわりが忘れられたときにつくられた解説だったのではないか。



白鳥神社（船岡）

この疑問に芦野泉「餅的伝説」(1) (『歴史手帖』15-9) はひとつの興味深い答を提供している。『豊後国風土記』速見郡田野についての伝説は「餅^{もち}的伝説」のひとつである。これによれば、豊作の水稲でつくった餅で弓矢の的をこしらえたところ、餅が白鳥となって飛び去り、以後は百姓が死に絶え、水田は荒廃した、というのである。結末が別の伝説も伝えられているが、共通するのは白鳥が稲作の豊凶と深いかわりをもっている点である。

芦野氏の説は鳥の糞の肥料効果に着目し、化学面から次のように指摘している。灌漑技術が導入される以前の、初期の水田の状態は水はけのあまりよくない湿地である。そこに残された大量の鳥の糞のうち、チッソ及びカリウムは水に容易に溶解して、終局的には流失してしまい肥料としての役には立たない。リン酸分も灌漑が十分に行われるような良質の水田では、土壌中のアルカリ分と反応してリン酸アルカリとなって水に溶けなくなるので稲作には何らの肥料効果もない。しかし、と芦野氏はいう。水田の状況次第では例外がある、と。すなわち、

1. 初期の湿原の縁辺で行われた水田のような場合、水はけの悪い水田では有機物の堆積によってその土壌は還元性となるので、リン酸は土壌と反応しないという特質がある。この場合はリン酸は稲の根に作用できるので、肥料効果を発揮する。
2. 水田稲作の場合はリン酸の肥料効果はほとんど期待できないが、年平均気温が著しく低い場合にきざってリン酸分の肥料効果が発揮されるという例外的な特長がある。

こうしたことから、年平均気温が著しく低い土地の、水はけの悪い湿田の場合はリン酸分の肥料効果が発揮される、つまり鳥糞の恩恵が現われるというのである。

芦野氏は稲作栽培が始まったころには灌漑技術が未発達であったため、低湿地での水稲栽培は不可能で、比較的高地湿原の縁辺部が多かったであろう、とし、高冷地湿原附近での稲作の収量の貧弱さと渡り鳥が飛来滞留した場合の効果の大きさを指摘しているのである。こうした渡り鳥の恩恵が背景にあって、白鳥の優雅さが渡り鳥のなかで、とりたてて信仰の対象となったと考えられる。

しかし、鉄製農具とともに伝えられた灌漑技術によって、低地の広大な湿原も畦の構築と配水管理によって水はけのよい良田となった。こうして、白鳥の恩恵は消滅した。しかし、白鳥祭祀は農耕の守護神として現在まで各地の農村に鎮守の神として残された。

そこに祀られる祭神は白鳥を祀る「白鳥大明神」などから次第に変容し、初期農耕に白鳥がもたらした恩恵と等質の結果を与えてくれた灌漑技術をもたらした者を祀るようになった、と芦野氏は想像する。



白鳥塔
(文化9年 四日市場・山神社)

現在、白鳥信仰に基づいて祀られたと考えられる「白鳥神社」の社号をもつ祭祀は全国に120社を数える（芦野氏）。なかでも、柴田・刈田の白鳥信仰はよく知られている。この地方の水稻栽培が、芦野氏の説のように、高冷地湿原付近から始まったことが、考古学的にどこまで実証可能か、また、なぜこの地方に顕著なかたちで残ったのかなど問題は残るが、白鳥信仰についての、1つの興味深い見解ではある。

ちなみに、筆者は故柴田倫之助氏から、シラトリとはいわない、シロトリであると訂正されたことがある。シロトリは「城盗り」に通じるとは、氏の御教示であったが、筆者のおもいつきか、あるいはほかの誰かの説か、今はさだかではなくなった。

幕末、伊達慶邦は刈田地方に百姓一揆がおきたら、白鳥を竿につるしてこれにあたれば、たちどころに鎮圧できるとたわむれたことがあると伝えられる。その伊達氏は、白鳥ならぬ錦旗をおして進軍してきた薩長を中心とした新政府軍の前に平伏したのであった。

移住か帰農か

主人（家臣や領民は屋形様とよんだ）を失って呆然とする柴田家中に追いうちをかける知らせがもたらされた。明治元年12月、盛岡藩・南部彦太郎利恭を白石に転封し、仙台領の南方5郡（柴田・刈田・伊具・亘理・宇多）を領すべき旨が達せられたのである。

仙台藩では62万石の知行高が28万石に減ぜられ、これまでどおり家臣を召し抱えることが困難となった。この事態に対し、郡村に知行地を有している者はそのままその土地に帰農させることを軸に対処しようとした。しかし、南部氏の領地となる仙南地方ではこの方法は期待できない。まして、年がけて南部家中の移住のことが現実のものになり始めると、仙南に知行地をもつ仙台藩士とその家臣だけでなく、農民の間にも動揺が広がった。仙台藩では地方知行が幕末まで続けられており、家中といえども農民と同じように鋤鋤をとって農作業にあたった。南部家中の移住は、数万の旧伊達家中とその家臣・家族の立ち退きを意味し、田畑の耕作が行きとどかぬようになり、その荒廃が懸念されたのである。

明治2年正月17日付の伊具・亘理・宇多3郡の農民代表連署の歎願書（『伊達町史』上所載）は、農民たちのそうした不安の現われであった。武士には2つの道があった。先祖伝来の土地にとどまろうとすれば、脱刀のうえ帰農して南部藩の農民となる、これがいやなら流民となって土地を去らねばならない。

行く末に対する不安は柴田氏の城下、舟岡にも同じようにあったであろう。否、家中の意見を統一すべき柴田意広がない分だけ混乱は甚しく深刻でもあった。

混乱のなかで、亘理の伊達藤五郎邦成は家老田村顕允（当時は常盤新九郎といった）とはかって北海道移住開拓のことを請願した。明治2年5月28日のことである。これは第3の選択肢であった。柴田家中のなかに、この亘理の選択に注目した人たちがいた。移住開拓の計画が家中一同に披瀝されたのは6月25日のことであった。「歴代略記」には次のようにある。

干時明治2巳の年、御家来中帰農致候所、其内同年6月25日、大和田三郎兵衛を始め、加茂勇伍、庄子金吾、岩間敬之進後、敬吾と改む、咲間永悟等の者より帰農中へ廻状をなし、同日妙法山蓮華寺へ屯集なすべき由なり。依て一統寄る。然るに此後帰農を止め、郷土と成る事を企つ、是深き悪計あつての事と見えたり

『大高山神社とそのかわりをもつ郷土史』より

大河原町教育委員会発行

「白鳥大明神」—大高山神社別称—

白鳥信仰の伝説

「神祇志料」の中に、「大高宮または白鳥明神という。蓋日本武尊を祭る…凡毎年正月15日、8月朔、11月8日祭を行う。本郡35村及刈田郡の民並白鳥神を祭るを以てなり、土俗白鳥を崇ること尤も甚たしという」と記してある。

最初日本武尊が蝦夷東征のため御住居になったこの地に「白鳥大明神」を創建して尊を崇め祀ったが、その後に橘豊日尊もお出でになったので一緒に祀ることになったという。1社2神の祭神をもつこの白鳥明神社は大鷹社といわれるようになったから、鎮座する字名も尾鷹と呼ばれた。

日本武尊を祭神とする白鳥明神は、この大高山神社のほかにも、宮の刈田嶺神社と村田の白鳥神社がある。また船岡の白鳥神社もあるが、これは後世柴田家の氏神として元禄12年9月に平村の大高山神社から分神遷祀したものである。

白鳥伝説は、「日本書紀」によれば、第12代景行天皇の皇子である日本武尊が、東国平定に向かわれたのは景行天皇40年（110）のことである。尊は吉備武彦、大伴武日連らを従え、駿河では火攻めの難にあい、相模では弟橘媛の尊い犠牲の物語りを残し、海路陸奥国に進み、葦浦、玉浦を過ぎ、竹水門で蝦夷を降伏させ、さらに日高見国まで進み常陸を経て帰途についた。その帰り道も各地の人々に接し皇化に俗させた後…尊伊吹山に入り大蛇にふれて痛み、伊勢に入り能褒野に没す。よって此地に葬る。尊白鳥に化して陵より出て倭国に向かって飛び去ると。群臣棺を開くに屍骨なし、是に使者を遣わして白鳥を追ひ尋ねれど倭の琴弾原に停れり、仍て其処に陵をつくる。白鳥更飛びて河内の旧市に留る。亦其処に陵を作る。故に時人この三陵を号して白鳥陵と曰う」と。

白鳥の飛び来たった箇所、すべてこれ尊の霊場としていつき祀ったのである。この「白鳥の伝説」が、語りつがれているうちに、橘豊日尊ともまつわり合うようになってきた。

尊は、第29代欽明天皇の皇子で、勅令をうけ東国巡幸の旅へ出られた。このころ東国の住民は心から喜び尊を迎え、帝都にあるご殿になぞらえ、この地にも立派な宮殿をつくり奉獻したという。尊はこの宮殿で、大和からご帰還の命があるまで、約3年ばかり滞在されたという。

ここで赤坂長者の娘玉倚姫との恋物語に発展する。玉倚姫は、世にも稀なる美人であり、性格も温和貞淑で、尊のごちよう愛はつるばかりであった。玉倚姫は白鳥が飛び来たって胎内に入る夢を見られたが、間もなく月満ちて皇子を生んだ。これは入国以来白鳥を神とあかめながら祈願したたまものと尊はいたく喜ばれた。しかし、その後「都へ帰還せよ」との命をうけ、姫と別れねばならぬ時が来た。尊は姫と皇子を乳母に頼み「万事よろしく」と、この宮殿に残すことにした。しかし、姫は別れをおしんで泣きさげび尊の側をはなれようもしない。尊は「3年後には必ず迎えるの使者をつかわす」とようやく姫を納得させ都に帰られた。

姫は、心に焼きつく恋しい尊を1日も忘れがたく恋慕の情はつるばかりであった。悶々の情をおさえて3年はすぎたが尊からの使者はついに来たらず音信さえとだえてしまった。姫はやがて病にたおれ、死期さえ間近かに迫った。乳母は悲嘆にあえぎしだいにやせ細る姫を見るに忍びず皇子をいだいて河畔に出た。「姫はいま尊を想いわずらい、命を落とそうとしています。あなたは神さ

まの化身だから、母上の身代りになって、父君を呼び戻して下さい。」と祈り、皇子を川の中に投じた。すると不思議にも皇子はたちまち白鳥となり、深谷の鳥越の里から大和めざして飛び立ったという。

(児捨川と鳥越という地名の起りとしてこの神話を今に伝えている)

続いて、姫も亡くなり、乳母も心を痛めながら息絶えてしまった。郷人はこれをあわれみ近くの山丘に葬り樹を植えたところが、前に飛び去った白鳥がこの樹に止まって日夜悲鳴して飛び去ることはなかった。

人々は不思議なこととして、この様子をつぶさに書きつづり、帝都に報告した。姫の訃報を聞いた尊は哀惜惨憺、早速使臣を遣わし、姫のため立派な墓を造り、都からの副葬品のかずかずを添えてねんごろに弔った。この時墓陵に白鳥が飛びあがり空中を旋回した。

使臣が帰ってこのことを尊に伝えると白鷹社を建て、供養し、重ねて重臣をこの地に遣わし、玉机、宝鏡、筆、硯、楽器、袍、袴などをおくった。

そして、この社を大鷹社というようになったという。

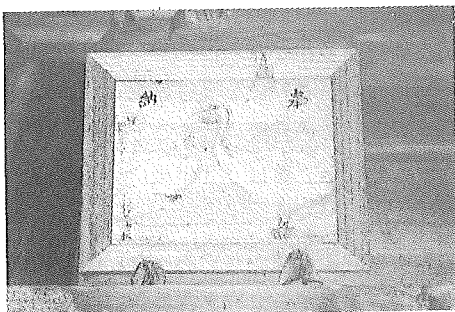
※ 日本武尊、橘豊日尊、それに玉倚姫との恋物語は、その筋をかえ所をかえて語りつがれている。

いずれにしても、大和朝廷と陸奥国との交渉をえがき、仙南地方における皇化服従の経緯を神話化し、白鳥神化の根源を形成したのである。

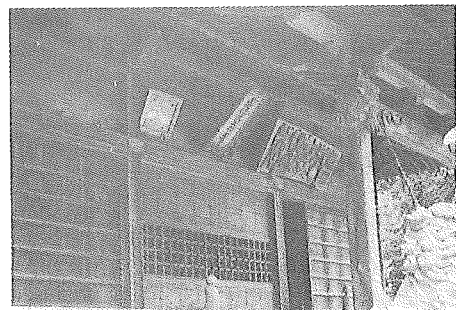
宮城県内、特に仙南地方には伝統的に白鳥信仰の精神が根強く残っている。戊申の役には、官軍が白鳥を射殺したため、柴田家家臣が大いに憤り、官軍への発砲となったいわゆる白鳥事件が起ったのもそのあらわれである。

また、ごく最近まで白い羽根を拾うと、「これは白鳥の羽である」といって神様におそなえする風習さえ残っていた。白い羽根を粗末に取り扱うと神罰があたりというのは、白鳥神化の思想のあらわれなのである。

蔵王町宮の「小野さつき先生」の殉難碑の建っているすぐ前の白石川に毎年このように白鳥が飛来してその優雅な姿を私たちに楽しませてくれる白鳥の群である。



白鳥の図（金ヶ瀬 大高山神社）



大高山神社拝殿正面の絵馬（左端が白鳥の絵馬）